

3年C組	まちづくりに挑戦～ヒロボラの活動～	山崎 立也
-------------	--------------------------	--------------

1 単元について

本校学校提案では、学習文化を「学校が、少なくとも学級が学習に挑む姿勢や雰囲気やさすもので、学校風土、学級風土とっていいものである」としている。もちろん学級風土と考えると、それを創っていくには「みらい」の学習だけでなく、学級でのすべての活動が関わってくるが、ここでは、「みらい」の学習に関わって述べることにする。

(1)学級風土と学級目標

本学級の学級目標は、「**反応する自分、反応し合うわたしたち**」である。

子ども達が学校学級活動をする上で、より能動的に積極的に活動していくためのひとつの条件として学級集団づくりが重要である。しかし、学級の編成は、機械的に編成されたものであり、そのままでは、その集団中での子どもそれぞれの活動や集団そのものの力が、十分に発揮されるとは思えない。

この集団が、その子どもにとって受容的風土を持ったものであった時、安心して生き生きと活動できると考える。しかし、その受容的風土は、はじめから存在するわけではない。学級のような同年代の者が機会的に成り立っている集団であればなおさらのことである。とすれば、学級集団をその集団を構成している者で、作り上げていく必要がある。そのことを意識して、先にも述べた学級目標を設定している。

目標にせまるために「聞く」・「話す」を大切にしたい。「聞く」・「話す」は表裏一体の関係にあると言われ、話し手や聞き手としてのスキルはお互い大切なものである。ここでは「反応する」ということを、より聞き手側にシフトして考えている。というのは、話し手にとっては、反応があることによって、言い放しでなく、再び自分にはね返ってくることで、自分の考えを再評価し、前進させていくことができると考え、また、自分の思いに対して反応があるということで、集団の中に自己の存在を確認することができる。もちろん個々人がそれぞれ集団を構成しているメンバーである以上、相互に刺激し合うことにならないと、学級集団がみんなにとって高め合う集団としては機能していかない。このような雰囲気の中で、個人や集団で問題を追求していこうとする力を発揮してほしいと願っている。

(2) 本単元での教師の願い

今、自分たちが住んでいる和歌山の町。その町がよりよい町であってほしいということは、子どもならずともそこに住んでいる人なら、みんなが思っていることである。その町に住み生活を営んでいる人々の在り様に触れ、思いにふれることが大きな意味をもってくる。

「みらい」の学習のスタートは、自分たちの目で見ること、見て感じたことから、子どもたちがどのように思い考えていくのか。そして、その思いから、今の自分たちができることを具体的にどのような行

動に立ち上げていこうとするのかという道筋を考えていきたい。子どもたちが生きていく将来は、市民参加型人権尊重社会であろう。町の在り様に対して働きかけること、行政に対して任せっきりでなく、より直接的に働きかけていくような目を持ってほしい。

子どもたちが、実際に行動に移していく時、考えを修正しながら、他者をも巻き込んでいくことも考えられる。そのためには、考えを確認していく時間と場というものを設定していく必要がある。時間而言えば、子どもが考え活動していく時間を、学習活動として確保していくもの、また一方では、その時間の中でじっくりと継続して考えていける根気を持ってほしいと思っている。場としては、活動場所は屋外と言うこともあるが、自分たちで考え話し合うベースとして教室であり、3Cの学級集団であると考え（作業によっては分業も考えられるが）。その結果、終末に達成感を持つことができるように考えている。

「みらい」や教科の学習の中で「書くこと」の時間を大切にしていきたい。学習の流れを振り返るとい意味とともに、自分の考えを見える形として作っていくを考えている。話し合い活動の時、少なくとも自分の考えをしっかりと持つことを子どもたちの中で共通なこととしたい。

(3) 学習材について

今年から社会科の学習が始まった3年生は、社会科の学習でも、子どもたちの身の回りの地域社会について学んでいく。その地域そのものやそこで生活を営んでいる人の生き方を通して地域社会の認識を深め、自分たちの住む町を再認識することをねらっている。

本学級の「みらい」の学習は、社会科の学習と扱う題材に共通性があるため内容面で重なるところが多い。しかし、「みらい」の学習の場面では、子どもたちが自分の思いを具体的に対象に働きかけていくことにより、自分と他者のかかわりについての学習を深めていくことができる。また、具体的活動の場面、例えばものづくりなどでは、図画工作科の活動と似かよった場面（作業の過程では、ものを作る楽しさを味わっている子ども）も出てくるが、同じように見える活動でもねらいが違うために、結果や過程に、「みらい」の学習のねらいにそった個人や集団の追求が現れてくると考える。子どもたちの思いは理想的なものに近い発想であり、どこであっても通用するものであろう。しかし、現実の社会に働きかけることで、矛盾や困難さを体験していき、問題に突き当たっていくと考える。

2 実践の考察

本学級の「みらい」の学習は、「子ども達が住んでいる町をよりよいものにしたい。そのために自分たちがどのように働きかけていくことができるか」という目標のもとに進められている。この目標を達成していくために「内容」と「方法」が設定される。

(1) 内容からの考察

今回の研究会までに、3つの小単元を行ってきた。「フラワーストリートをつくろう」「公園モニュメントをつくろう」「リサイクルで町をきれいに」の3つである。

この3つの内容は、社会科の内容と重なる部分が多い。3年生の社会科の学習では、自分たちの住む町についての理解を深め、そこに住む人働く人の想いや考えに触れることをとおして、社会を創っていく社会の構成員としての下地を、子ども達がつくっていくことである。このことは、本学級の「みらい」の学習にも同じことが言える。

「フラワーストリートをつくろう」では、3年生の子ども達が町を見てきて思ったことを、ストレートに実現していこうと考えていったが、実際には、道路を維持管理している行政の壁は厚かった。何人かの行政の人と交渉していったが、子ども達が考えたようには実現できなかった。もちろんその理由は、納得できるものではあるが。ここで、子ども達が考えたことをそれであきらめていくかどうかが問題になる。子ども達が考えたことが、目に見えて形になること、また、それを他の人がどのように見ていくかということを通して手応えを持つ、この手応えは子ども達の活動の次への原動力になる。しかし、ここで問題にしたのは、社会のルールである。現在存在するルールを尊重して活動した。その結果、「フラワーストリート」は、なかなか実現しなかった。もちろん、そのためのどのように対処するかを考えていくのだが、学習自体が這い回っているように感じられた。対照的だったのが、公園のモニュメントづくりである。公園をつくることについても行政だけに任せるのではなく、市民として参加していくという態度を養っていくのも大切なことであると考えた。今回は、行政からのバックアップもあって、順調に進んでいった(行政がリーダーシップを取っていることもあるが)。しかし、子ども達が考え、行動していく経過や結果が、見えるものとしてできあがっていく。具体的に自分たちの活動が目に見えていくこと、手応えの一つとして子ども達がとらえられることは大切である。



(2) 方法からの考察

「みらい」の学習だけに限らず、学級で行われるほとんどの活動が、集団としての形を取っている。しかし、この集団学習を充実したものにするためには、個人の学習を充実させていく必要がある。向かう方向は集団として同じであっても、考え方や対処の方法が違ったものであるだろう。自分の考えをどのように評価し発展させていくためには、集団の中で個々人の考えをすりあわせることも一つの方法である。そのためには、集団での学習の前に、子ども達はそれぞれ自分の意見をつくっていなければならない。とくに、「みらい」に時間には、次時の課題を明らかにして、それについて自分の考えを家庭学習でノートに記すという学習のスタイルをとった。

自分の考えを挙手してみんなの中で出していけない子どもも、そのノートを手がかりに集団の中に入っていくことができる。また、教師にとっても、そのノートに記された子ども達の考えを事前に把握することで、学習の組み立てができる。

研究会の授業(リサイクル作品をつくろう)では、着目児として3人の子どもをあげた。この3人はタイプの違う子ども達である。提案はしたものの、なかなか実現していかないA、集団の中に、表面的には積極的に関わっていかないが、みんなの話を聞き、自分の考えをしっかり持つB、知識があり、積極的に行動するCを取り上げた。

集団学習の場では、みんなの中でよく発言し、行動的な子ども達がイニシアチブを取って集団を引っ張っていく。Cはそうであり、目的遂行意識が強い。しかし、集団の中にはいろいろなタイプの子どもの存在し、そのペースについていけない子ど



ももいる。集団で活動していくという意味をどのようにとらえるのか、もちろん、一つにまとめられるものではなく、その時々やその子どもに応じて、より目的遂行か集団維持に重きを置くことになるであろうが、今回は、引っ張っている子ども、ついて行こうとしている子どもお互いがこのままでいけばつらくなり、集団として機能しなくなってしまう。集団で活動する意味を、お互い考えていく必要がある。Aは、自分が行き詰まっていることをノートに記し、みんなで行うことの意味を問い直していた。本音に近いものである。Aが、この考えをみんなの中に出していくことで、Bもその考えによりそって考え出したり、他の子ども達の中からも同じように賛同したりする者が出てくると考えた。

Aの意見は、多くの子どもに考える材料を与えることになったが、Cは、できていないことやその過程を強く非難していたが、Aの考えが出た時は、少しトーンが下がった。やはり、子どもの本音に近い考えには、問いかける力がある。しかし、一度はトーンダウンしたCではあるが、その後も批判的な意見を続けた。やはり、集団としての活動の意義を問い直す必要がある。

3 今後の課題と展望

「みらい」の学習を進めるにあたって、今まで同様に家庭学習(ひとり学習)を充実させることで、集団学習の場を子どもたちのより活気ある場所にしたい。また、子どもの記したものを手がかりに学習を組み立てていきたい。しかしながら、その授業の組み立てが、教師本位の見栄えのよいものを追求するのではなく、子どもたちがよりよく考えていけるように組み立てるということを考えていきたい。

内容面では、2学期までの活動の自己評価を中心の課題とし、今までを振り返り、形としてまとめていくことを考えている。そうなれば、集団としてどのように活動していくか、集団活動の質、みんなで協力するとはどういうことかを問いながら、学習を続けていくことが考えられる。

4 実践研究テーマの設定

「みらい」の学習は、教科の学習とは異なる。目標はあるが、何をどのように学んでいけばよいのかについては、学校学級に任せられている。しかし、学級で「みらい」の学習の目標を設定すれば、その目標に向かう方法と内容が必要である。特に、内容でいえば、どの学年の、どの学習内容と関連しているのか。その関連から見て、当該学年として妥当な内容であるか、吟味していく必要がある。

キーワードとして:方法知 内容知 学校学級カリキュラム

また、学級という集団で学習を進める限り、学級での人的経営が重要である。学校提案にもあるように、学級の学習文化と学級風土とは一体と考えている。学級の雰囲気などは、具体的に数量などでは、推し量れない評価しづらいものである。しかし、学校教育にしかないものは、集団での学習である。そういう意味で、学級経営の大切さを改めて感じる。

キーワードとして:受容的学級風土 集団学習と個人学習 学級経営
以上のことを念頭に置きながら、今後進めていこうと考える。